

第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 一般 - 56

学校名・団体名	岡崎市立梅園小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	自己肯定感を高め、主体的に学び合う子ども
<p>〈活動・研究の意義および活動報告〉</p> <p>3年間にわたり、子どもの主体性を育てる研究を進めてきた結果、そのような授業づくりのための教師支援は、徐々に明らかになり、主体的に活動できる子どもは増えてきた。子どもの多くは、自己肯定感をもって活動できている。しかし、子どもの中には、教師から見て気になる言動・態度を示す者もいる。例えば、「どうせ、自分は〇〇だから～～できない」と、やや投げやりになり、自信がもてず不適応を起こしがちな子どもなどである。そのようであれば、授業の中だけで教師支援をたとえ工夫をしても効果は見られない。そのため、子どもの生活面での背景を探り、何らかの働きかけが必要となってくる。すなわち、子どもの生活面と授業面の両面から子どもをとらえ、主体性を育てる働きかけを行う中で、子どもの自己肯定感を高める支援が必要と考え、実践していくことを考えた。</p>	

1 はじめに

本校の子どもたちは、一見、きちんとした活動ができるように見えるものの、その意味や充実感が十分に味わえず、中には活動を悲観的に考える子どもまでいた。それは、教師が、前向きに子どもを育てようとするものの、それを具現化するよりよい指導ができず、指示傾向の働きかけが中心となっていたことに起因する。

こうした実態をとらえる中で、子どもの「どうせ自分は……できない」という言葉が気にかかった。子どもは、内心は「やりたい」と思っているだろうが「できない」と自分で決めつけているのである。まわりに働きかける関心の弱さもあるが、それ以上に自らに自信が持てないためにまわりに働きかけられない状態になっているのではないかと推察された。実際に、それに気づいていた教師集団も、短時間で済むような場当たりの働きかけで、子ども一人一人に自信を持たせる具体的な方策を講じることができていなかった。

そこで、子どもが自信を持って活動できることとともに自ら考えて学び続けること、すなわち、「自己肯定感を高め、主体的に学び合う子ども」を求める子どもの姿として、本主題を設定し、教師支援のあり方を探った。

2 仮説と手立て

仮説(1) 自分、または自分のまわりのもの、こと、人のよさを認識できるようにすれば、自己肯定感を高めることができるであろう。

(2) 子どもが、互いのかかわり合いの中で、価値判断をし意思決定をすることができるようにすれば、主体的に学び合うことができるであろう。

仮説を具現する手立てとして、次の㉑～㉔を試みた。

(1) 仮説(1)に迫るために

- ㉑ 「ふわふわ言葉」の励行と授業等での教材化 (全校・学級の活動)
- ㉒ 「ふわふわの木」づくりとその紹介活動 (全校・委員会の活動)
- ㉓ 異学年交流のペア学級交流 (全校の活動)
- ㉔ 「よいこと見つけ」活動・「こんな自分がすき」活動 (学級の活動)

(2) 仮説(2)に迫るために

- ㉕ 文脈の中で自分事と考え追究・活動できる教材の選定 (教科・総合的な学習)
- ㉖ 子どもが価値判断・意思決定を促す発問の工夫 (教科・総合的な学習)



●ふわふわの木

3 研究の計画

平成27年度より3年計画で、上記2の「研究の手立て」を、下表のように位置付けて実践を行い、その手立ての有効性を探った。多くの実践は、平成27年度に設定したもので、それを年度ごとに見直し、評価・改善をしながら修正を図り、継続的な実践を通して、自己肯定感を高め主体性を育てる教育に取り組んできた。

	自己肯定感を高める手立て	主体性を育てる手立て
H27	<ul style="list-style-type: none"> ○なにかよし集会(6月・12月実施)【現在も継続】 <ul style="list-style-type: none"> ・「ふわふわ言葉」の説明、励行をする。㉑ ・生活アンケート、学級目標を発表する。 ○ペア学級交流 ㉓ 【現在も継続】 <ul style="list-style-type: none"> ・本の読み聞かせ、あいさつ活動をする。 ○「ふわふわ言葉」「チクチク言葉」を道徳の授業等で授業実践 ㉑ 【現在も継続】 	<ul style="list-style-type: none"> ◇主体的に生き生きと学び合う授業 <ul style="list-style-type: none"> ・「主体的な活動」の意味と手立て(価値判断と意思決定を促す)の確認 ㉑ ・「ひとり調べ」での教師支援の明確化 ㉑ ・教科・総合的な学習の授業実践 ㉑ ㉒ ◇「梅園百歳」の活動 ㉑ ㉒ <ul style="list-style-type: none"> ・梅園小が現地に移って100年の記念行事
H28	<ul style="list-style-type: none"> ○ペア学級交流 ㉓ <ul style="list-style-type: none"> ・音楽集会での発表を加える。 ○朝・帰りの会での「よいこと見つけ」 <ul style="list-style-type: none"> ・「こんな自分がすき」活動 ㉑ 【現在も継続】 	<ul style="list-style-type: none"> ◇主体的に生き生きと学び合う授業 <ul style="list-style-type: none"> ・「かかわり合い」での教師支援の明確化 ㉑ ・子どもの思考の道筋を明確にする指導案(子ども主体指導案)の考案 ㉑ ㉒ ・教科・総合的な学習の授業実践 ㉑ ㉒
H29	<ul style="list-style-type: none"> ○「ふわふわの木」の実践 ㉒ 【現在も継続】 <ul style="list-style-type: none"> ・ふわふわ言葉を木の葉として掲示する。また、その内容を放送で紹介する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇主体的に生き生きと学び合う授業 <ul style="list-style-type: none"> ・「学びの本質」に迫る教師支援の明確化 ㉑ ㉒ ・子ども主体指導案での授業実践 ㉑ ㉒ ◇「梅園プライドフェスティバル」の活動 ㉑ ㉒

4 まとめ

学年末に実施しているアンケートの一項目「うれしいことをしてもらった」の回答は、手立て㉑～㉔の取り組みにより確実にその件数は増え、平成30年度は平成28年度の1.5倍となった。それが、全国学力・学習状況調査「自分にはよいところがある」と回答する割合に結びつき、全国のデータを超え、ここ2年間では10ポイントほど上回る結果となった。これは、子どもが自らのよさを自覚的に感じている表れととらえている。すなわち、手立て㉑の「ふわふわ言葉」、それを広げた手立て㉒の「ふわふわの木」、手立て㉓や手立て㉔の等の活動が、子ども相互のかかわり合いの中で効果的に働いている。つまり、自分のまわりのもの、こと、人のよさを認識できるようにすることが、子どもが自己肯定感を高める上で結びついていることが分かる。

各教科・領域の日頃の授業実践の中で、子どもが主体的に考える取り組みをしてきた。詳細は省くが、子どもたちの授業への取り組み、全国学力・学習状況調査の右肩上がりの傾向から、その成果を大いに感じる。なお、前述した自己肯定感の高まりとの相互関連もあり、それも効果的に働いたと考えられる。

